慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ナチズムに至る政治思想史的背景
Sub Title	Pre-Nazi political thought in Germany
Author	多田, 真鋤(Tada, Masuki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1963
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.36, No.3 (1963. 3) ,p.65- 89
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19630315-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ナチズムに至る政治思想史的背景

多田真鋤

はじめに

「ドイツにおいては政治は他の国民のもとにおけるよりは魂のはるかに奥深い層において行われる。――あまりにも深い層において。政治的な問題は究極の世界観的見地から決定せられ、したがつてまた究極的な世界観的見地もまた政治的立場によつて決定せられる。政治的に進歩的であるがゆえに、自由思想家であるというのは、ちようど、神は保守的な生活様式にふさわしいから神を信ずるというのと同様である。政治は世界観の層で行わるべきはずのものではなく、目的合理的というもつと表面に近い層で行わるべきはずのものである。」[1]とグスタフ・ラードブルフ（Gustav Radbruch）は、一九三一年の憲法記念日に「ドイツの政治」についての自己の相対主義的法哲学に立脚した政治観を吐露している。

ワイマール・ドイツの終焉と第三帝国の成立を、マイネッケ（Friedrich Meinecke）は「カタストローフェ」といい、ゼル（Friedrich C. Sell）はそれを「トラゲディー」といい、アブッシュ（Alexander Abusch）においては、ドイツ国民の「イルヴェーク」と表現しているが、[2]その由来するところは実に深刻なドイツ精神史上の課題であろう。

かなり長期間にわたつて保守主義の政治的イデオロギーによつて支配されていたドイツが、一九一四年以降突如として変容し、表見的立憲主義（Scheinkonstitutionalismus）と封建的パトロネージの支配に代つて、デモクラシーの政治形態を一度は採つたものの、その内在的欠陥によつてナチス革命を再度招来したのであつた。一九三〇年当時のドイツ議会には一三の政党が分立して、政府は事実上の多数党となることが不可能な状況を呈していた。

そして、これらの政党の掲げる綱領は、詳細な点においては種々相違していたが、イデオロギー的観点からは二つの相対立する勢力にわけてみることができよう。それはかつての保守勢力と革新勢力の対立というよりも、はるかに政治的領域を超えた世界観の深層にまで入つてゆく争いであつた。

すなわち、単純化していえば合理主義と非合理主義間の争いであり、マイネッケの所謂「Homo Sapiens」と「Homo Faber」の対決にも通じるものであつたといえる。[3] 一九世紀を通じて合理主義が従前にない発展をとげた後、この合理主義に対する反対運動が現われてくる。その反対運動は非政治的領域――芸術、文学、哲学等――にまで滲透していつた。

これらの非政治的領域におけるカウンター・ムーブメントの共通の目標は、打算的な合理主義（calculating rationalism）への批判であり、対抗であつた。戦争のデーモンは戦後の世界を通じてもろもろの非合理的諸傾向を誘引しながら次第に Primitivism を育成し、遂にナチズムの終局的勝利を招来させたのである。合理主義と非合理主義、理性派と行動派の対立相剋の歴史がナチス以前の政治思想史的背景である。

「どの政治観も証明不可能であり、どれも反駁不可能である。どの政治観も証明不可能であるがゆえに、それはどんな他の観念からも反対を受けねばならない。どんな政治観も反駁不可能であるがゆえに、それはどんな他の観念によつても尊重されなくてはならない。自分自身の立場を断乎として主張することと、他人の立場に対する公正とが政治闘争の二つの基本原則である。ところがドイツ人は自分自身の確信を無謬の政治的啓示だと考える。それゆえかれにとつて政敵は馬鹿でなけれ

ば犯罪者である。[4]」と、ラードブルフは、ドイツ政治に内在している問題点を鋭く衝いている。

この小稿においては、ナチス革命を招来した政治思潮を、二、三の思想を例証しつつ、概観してみようと試みるものである。[5]

(1) Gustav Radbruch; Kulturlehre des Sozialismus, Ideologische Betrachtungen. 1949, S. 51.

(2) Friedrich Meinecke; Die deutsche Katastrophe, Betrachtungen und Erinnerungen. 1949. Friedrich C. Sell; Die Tragödie des deutschen Liberalismus. 1953. Alexander Abusch; Der Irrweg einer Nation. 1951.

(3) F. Meinecke; a. a. O. S.S. 56-63. マイネッケは、homo sapiens（理性人）と、homo faber（生産人）という二つの人間像を措定し、「近代の文化と文明に浴している人間にあつて、最も重大なものは、合理的な力と非合理的な力との間の健全な、自然な、そして調和的な関係である。……悟性と理性が一方の領域の力であり、心情、空想、熱望、および意欲が、今一方の領域の力である。結局は理性が、それ故に合理的な力が、全体の心の波動を支配すべきものである。しかしこの理性は、その最高・最善の働きをなすためには、それ自身すでにまた、非合理的な諸々の力によつて養分を与えられねばならない。」といい、更に又「個々の心の力の一面的な発展はいかなるものでも、それが合理的な力であろうと非合理的な力であろうと、全体を攪乱する惧れがあり、まただんだん高まつて行くと最後には、個人にとつても、集団にとつても、民族にとつても悲惨な結末に立到り、椿事の嵐が彼等を危険な方向に追いこむ可能性がなくはないのである。」（矢田俊隆訳）といつて、ナチス革命前のドイツ政治を回想し、将来への警告を語つている。

(4) G. Radbruch; a. a. O. S.S. 49-50.

(5) 本稿においては、ナチズムの政権確立以前の個々の具体的な思想内容を個別に検討し、それらとナチズムとの関連について考察することに目的があるのではなく、ナチズムに道を開いた種々の政治的イデオロギー一般を概観してみたのである。その過程において個々の思想の一端に触れることにはなるが、いずれ稿を改め、ナチズムとの関連において個別的に思想内容を検討してみたいと考える。

一

ナチス・ドイツに至る政治的イデオロギーとして、われわれは当初にドイツ自由主義の特質とその展開に眼をむけてみたい。ドイツにおける自由の理念は、ヨーロッパの諸国におけるものとはかなり相違している。例えば、トレルチ（Ernst Troe-

lisch）の「自由とはわれわれドイツ人にとつては、個々の意思の総和から統治意思を形成することではなく、選挙人が被選挙人を拘束することに本意があるのでもなく、歴史、国家、民族によつて本来すでに存在している全体へ、自由な意思と義務の精神で献身することである。個人によつて全体が組織されているのではなく、個と全は同一のものである。自由とは平等ではなく、個々人がその分野において自己の機能を発揮することであり、そこに個人の尊厳もあるのである」[1]との見解のうちにドイツ的自由理念の特徴がティピカルに表現されている。

一九一七年に碩学トレルチをして、ドイツ的特殊自由理念を表明させた背景には、当時の時代的要請もあるにはあるが、然し、それはドイツ自由主義の歴史的展開の過程において必然的に特殊化された特性であり、ひいてはその「特性」がナチズムの思想を間接的に媒介したものであるといえよう。ドイツにおける自由主義も他のヨーロッパ諸国におけるものと同様に、一八世紀啓蒙思想のうちにその濫觴がある。自然権の観念、個人的、市民的自由の尊厳、これらの権利を擁護するための国家の義務の問題等は、ドイツにおいても一九世紀初頭において日程にのぼつてくるのであるが、そこにドイツ市民社会の後進性という障害にあい、特殊化の運命を担うのである。

一般にドイツ自由主義には次の三つの源泉があるといわれる。すなわち、第一は一八世紀後半に始るドイツ理想主義哲学の系譜であり、「自由」を絶対的、形而上学的認識の対象とするものである。カントは法と道徳を峻別し、法を国家に、道徳を個人に帰し、フンボルトは国家の権限を個人に対する最小限度の必要な保護に帰し、ヘーゲルにおいても自由理念を以て最高のものと考え、自由主義の政治的イデオロギーをもたらした一七八九年のフランス革命を評価はしたが、ついには国家至上主義の哲学に発展して個人的自由そのものも国家有機体に従属せしめた。

これら哲学的自由理念の発展とともに、第二は所謂ナポレオンの Fremdherrschaft に対する抵抗運動の中に自由主義の政治的イデオロギーは形成されてくる。然し、当時のドイツにおける中心課題は「政治的統合」であり、ナショナリズムが

先行してリベラリズムは副次的役割を与えられることとなる。

第三は、所謂産業社会化時代における市民階級の自己主張のうちに現われてくる。農奴解放、ギルド制の廃止、地方自治、自由貿易論等の諸問題が、市民階級の主要な関心事となり、そこに近代リベラリズムの様相が明瞭化されつつ発現してくるのである。

ワイマール・デモクラシー体制以前のドイツにおいては、自由主義が政治的ヘゲモニーを掌握する好機が二度到来している。すなわち、一八四八年三月革命の当時と、一八六二年のプロイセンにおける国王と国会の争いの際であつたが、この二度とも自由主義はその好機を失してしまつた。

一八六二年とそれに続く数年においては、ビスマルクによつて本来自由主義の課題の一つであつたドイツ統一問題が解決され、自由主義はその主要なる目標の一つを失つてしまつた。

ビスマルクの新体制においては、法治主義の原則、男子普通選挙権、言論、出版の自由等、自由主義の掲げる諸原則に対する実質的譲歩はなされたが、実際は、所謂表見的立憲主義（Scheinkonstitutionalismus）そのものであつた。

更に、政治的自由主義勢力の重大な退歩は、ビスマルクの政策の過程において進歩党（Fortschrittspartei）と、国民自由党（Nationalliberale Partei）に分裂し、勢力が二分されてしまつたことにもあつた。

政治的自由主義の無力に反比例して、一九世紀末葉の頃から自由主義の文化領域における機能の重要性が考えられるようになる。

すなわち、あらゆる文化的領域において伝統的な権威への盲目的な従属からの解放が成就されようとしてきたことである。自然科学界の飛躍的発展とそれに伴う種々の理論に基礎をおく唯物論哲学は、従来の形而上学的思考の枠内から脱皮しようとした。

キリスト教神学の世界においては、従来の宗教上の諸問題に対して超自然的啓示とみる教義に代つて人類学的現象として把握する立場があらわれてくる。

エッシェンブルグ（Theodor Eschenburg）は、「第一次世界大戦の勃発に至るまで、実際政治の面においても、理論的分野においても、立憲体制の民主化、権威国家から国民国家への転廻の問題が法学や社会学の学問領域で実際的且つ根本的に考慮され準備されている労作は一つも存在していなかつた。」[2]と極論している。然し、政治の実際的側面においては確かにエッシェンブルグの指摘のように、所謂自由主義勢力は後退し、政治的発言の機を失していたことは事実としても、自由主義の文化的領域においては、例えばマックス・ウェーバーのような稀有な存在がこの時代に特筆されるものであろう。

モムゼン（Wolfgang J. Mommsen）は「ウェーバーは、その全生涯を通じて政治問題に没頭していた。彼の同時代の少なからぬ人々が、時には彼自身も彼が実際政治家の道を歩むのではないかと期待した。彼の学問上のあらゆる著述や知的な卒直さと学問的客観性をもとめる彼の仮借ない努力は、ある意味ではその時々の政治の実際問題に対する距離と内的自由を得るための不断の大規模な試みであるとも解釈され得るのである。その限りでは実際政治というよりは、むしろ政治一般としての政治が彼の生涯と労作において中心的位置を占めていた。そしてこのことはすでに彼の生涯の初期の研究にも該当することであつた。マックス・ウェーバーはいわば政治の中に産み落されたのである。（Max Weber wurde gleichsam in die Politik hineingeboren.）」[3]と述べている。

ウェーバーが道徳的観念と宗教的観念との関連領域の未知の問題を探究し、更に経済機構の解明と同様に政治問題への鋭い分析は、合理主義的、自由主義的姿勢なくしては不可能なものであつたといえよう。すなわち、モムゼンのいうウェーバーの「実際政治に対する一定の距離の確保」と「内的自由を得るための不断の試み」という精神的態度は、当時代のドイツにおける自由主義の文化的指導理念の表現であるとみることができよう。

さて次にウェーバーに深甚な思想的影響を与えた自由主義のイデオローグとしてわれわれはナウマン（Friedrich Naumann）を忘れてはならない。ナウマンは当時代の自由主義思想家として次のような見解を抱いていた。

未組織の大衆の向上を図るには道徳的な訓戒や人間の理性に訴えることによつては成就できない。それは社会状態の経済的改善によつてのみ成就しうるものである。

当時の進歩派の人々や社会主義者たちは、プロシヤ国家の封建的パトロネージに対して反感を抱いていたので、軍備拡張や植民地拡大による国力の増大に反対していた。然し、ナウマンはこれらの社会主義者たちの見解に対して、国家権力とデモクラシーは決して矛盾するものではないという考え方に同意させようと努力した。すなわち、デモクラシーとモナーキーとは必ずしも矛盾するものではなく、その所以は近代国家の複雑性は個人による支配を実際上排除しているからである。アングロサクソン流にアブソルティズムから議会制君主政体へという線に則つてドイツ・デモクラシーは発展すべきであるという信念に基づいていた。然し、彼においてはドイツの国威発展のためには、世界貿易を必須のものと考え、そのためには帝国主義的な主張や、ナショナリズムの権力国家思想との妥協もやむを得ないものとしている。(4)

(1) Ernst Troeltsch; "Die deutsche Idee von Freiheit" in Deutscher Geist und Westeuropa. 1952, S. 96.

(2) Theodor Eschenburg; Die improvisierte Demokratie der Weimarer Republik, Geschichte und Politik. Heft 10. S. 18.

(3) Wolfgang J. Mommsen; Max Weber und die deutsche Politik 1890–1920. 1959, S. 1.

(4) ナウマンにおいては、ドイツのナショナル・インタレストを確保すべき方途としては、ドイツの皇帝政治を時代の要求に適応してゆけるように近代化してゆかなくてはならないと考える。すなわち、彼はその著「デモクラシーと帝政」(Demokratie und Kaisertum. 1900) において、「社会的帝政」(Das soziale Kaisertum) という概念を導き出し、この社会化された帝政によつてのみドイツの国内秩序の確立と対外的主権の独立性を確保することが可能なのであるという見解を披瀝する。ナウマンのこの思想については、F. C. Sell; a. a. O. S.S. 292–293. および William J. Bossenbrook; The german Mind. 1961, p. 364. 参照。

このようなドイツ精神界の状況について、G・ルカーチは次のように評している。「民主主義への批判が進歩した西欧的な精神傾向としてド

イツに受入れられたので、結局のところ他の歴史的およびイデオロギー的基礎づけと共に、民主主義のための闘争を弱化し民主主義からイデオロギー的・政治的活気を奪つたイデオローグたちにたいする降伏が生れた。特色ある一例だけを挙げるとすれば、ヴィルヘルム時代の最も卓越したドイツの市民的社会学者であり歴史家であるマックス・ウェーバーを考えればよい。愛国主義的理由から、ウェーバーはヴィルヘルム体制のディレッタンティズムと、フランスやイギリスの民主主義と外交的に太刀打ちできぬ無能とに反対した。それゆえ彼は、ますますドイツの民主化へのきつぱりとした味方となつたと自認していた。しかし、彼の考えの中へは民主主義に幻滅した西欧的な批判が深く滲透していたので、彼にとつてはこの民主主義も現存の体制に比較して「より小さな害悪」だというにすぎなかつた。似通つた矛盾は、もちろん各人各様にではあるが、この時代の他の政治家や思想家、たとえばF・ナウマンその他においても見いだされる。このようなイデオロギー的基礎の上では、いかなる徹底した市民的・民主的精神方向も党派も成立できないということは明白である。（ナウマンにおいては、左翼的批判の右翼的原理と右翼的実践へのこのような反転が特にはつきりと見られる。）」(G. Lukács; „Über einige Eigentümlichkeiten der geschichtlichen Entwicklung Deutschlands" in „Die Zerstörung der Vernunft. 1954. 訳文は思想・一九五五年四月号「ドイツの後進性と非合理主義（下）」参照）なお、三宅正樹「フリードリッヒ・ナウマンとその時代――ワイマール・デモクラシー成立前史――」（史林第四十一巻第五号）「フリードリッヒ・ナウマンと大衆社会」（思想一九五八年八月号）参照。

二

さて、一九一八年のドイツ革命は、エッシェンブルグの表現によれば、木に竹を接いだような即興曲（Improvisation）的デモクラシーを結果したといつているが、その表現はともかくとして自由主義の有する政治諸原理にもとづいた民主主義的共和制度の成立によつてその幕を閉じたのであつた。

最初のワイマール共和国大統領エーベルト（Friedrich Ebert）が、「世界で最も自由主義的」であると称したワイマール憲法は、一九世紀的自由主義原理に立脚するもろもろの権利を広範に認めつつも、資本主義経済機構に内在する矛盾を修正するため、所有権の義務性を強調した頗る近代性を具有した憲法であつたといえる。一八四八年当時においては、リベラリズムとデモクラシーは、ドイツにおいてはそれぞれ特殊な意味内容をもつていたが、ワイマール憲法体制下においては、世界観

としての政治思想を強調するリベラリズムと、政治組織を規定するデモクラシーによつて、ドイツ・リベラリズムは適切な地位を確立したのである。

然るに、ヴェルサイユ条約の苛烈な桎梏のもとにあつたワイマール共和国は、外的な障害とともに内的な障害に当面していた。

すなわち、それはドイツ人が、従来ほとんど日常的体験をもち得なかつた自由主義や民主主義を、いかにして国民統合の精神的中核に形成してゆくべきかという課題であつた。

このいわば一種の政治教育の眼目はまず青年教育にむけられた。これらの政治教育の目標はかなり高度なものであり、青年たちは「何を知つているか」という知識力よりも「何んであるか」という人格の問題によつて判断すべきことを教えられた。形式主義よりも自発的精神が重視せられ、隔絶した縁遠い専門的知識を修得するよりも、現実生活をよりよく改良してゆくことについて啓蒙された。

さらにまた、それらの政治教育はドイツの権力思想には関心を示させず、ドイツの綜合的文化問題に関心をむけさせようと試みた。

これらの政治教育は、一時一九〇〇年頃に始つたワンダーフォーゲルの青年運動の中にくみ入れられかけたが、戦後のワイマール体制下においては、自由主義が余りに極端に、過剰に表現されたので政治教育は定着できず、青年運動は組織と訓練と服従の方向に方向転換がなされていつた。

ワイマール体制下の自由主義の運命は、これら政治教育の早急性、焦躁感の中にもその悲劇性の一面を内在していたものであるともいえよう。

ここに「自由主義はナチスによつて破壊されたのではなく、むしろナチスは自滅した一個の思想体系の正当な継承者であ

つた。自由主義が自滅しなかつたならば、ナチスは決して権力を把握しえなかつたであろう。[1]」「二〇世紀の知識階級が前世紀の文化人よりも勇気を喪失していたとか、或は議論を活潑にしなかつたとかいうことではなく、むしろ彼らの自由主義的信念が不安定であり、且又深く根をおろしていなかつたということである。

この観点より次の疑念が起る――ドイツにおける自由主義的イデオロギーの死滅と自由主義イデオロギーの具体的表現としての自由主義的諸制度の破滅とは、ヒットラーと民族社会主義者の奸策によるものというよりは、むしろ自由主義自体のもたらした結果ではないかという疑惑である。[2]」とのハローウェル（J. H. Hallowell）の所説は、ワイマール・ドイツの知識人とその自由主義思想の貧困を的確にスクープ・アウトしているといえよう。[3]

このナチス以前の知識人の自由主義思想の一例として、次に暫くワルター・ラテナウ（Walther Rathenau）の思想の一端を考察してみよう。[4]彼は、第一次世界大戦の勃発とともに頗る短期間のうちに戦時原料品の調達に成功し、戦後は敗戦に伴う種々の難局打開のために奔走し、一九二〇年にスパー会議、二一年にはロンドン会議に出席し、同年五月復興相となり、二二年には外相も務め、独ソ間のラッパロ条約の締結を行い、更にロイド・ジョージとともにヨーロッパ連盟を提唱した国際主義的感覚と独自の経済政策論をもつた政治家であつた。そして、その思想的位置は、クルト・ゾンタイマーによれば、マックス・ウェーバー、フリードリッヒ・ナウマン、エルンスト・トレルチ、トーマス・マン、フリードリッヒ・マイネッケらの思想家と同様に、ワイマール・デモクラシーに対して積極的な「右からの反対派」ではなく、いわば心情においては共和政よりも君主政に強い愛着を抱いてはいたが、ワイマール共和国が成立したという既定事実に対しては、理性的にこれを肯定しようとした、所謂「理性の共和派」に属していたのであつた。然し、このラテナウの自由主義思想がある意味でナチズムに間接的に道を用意したものであるともいえる。

すなわち、ラテナウの政治思想において特徴的なことは、当時代のリベラリズムとソシアリズムの両方のイデオロギーに

対する批判としてあらわれたことにある。

何故ならば、彼によれば自由主義と社会主義の二つのイデオロギーにおいて、共通するところのものは、両者とも機械主義的、唯物論的な世界観に立脚しているからである。

この二つのイデオロギーは既存制度の批判にのみ終始し、科学の進歩の確実性をオプチミスティックに信頼し、もつと深層に横たわる本質的問題に対決していないと彼は考える。

特にラテナウは機械化（Mechanisierung）ということが近代精神を必要以上に歪曲していることを強調する。この機械化という近代文明の本質的問題、例えば機械化に伴つて必然的に生じてくる impersonal なマスの問題に対して、彼は頗るペシミスティックである。

そして、彼は、一九〇〇年から第一次世界大戦までの唯一の綜合的政治哲学であり、かつ社会政策の書といわれる著述「Von kommenden Dingen. 1917」において、当時代の解決策を提示している。すなわち、社会主義者はマルキシズムの階級理論に基づく革命方式によつてではなく、富裕階級の奢侈を制限し、貧民階級の生活水準を向上させることによつて、封建制度、カスト的秩序、金権政治、階級対立等を排除することが可能であるという見解を示した。資本主義的独占形態は、怠惰と同様に排斥されるべきであり、あらゆる有効な社会力を精神的、物質的な生産力として動員しなければならない。

更に教育の機会均等とともに、教育においては実際に有効な指導性を与えるべきであり、身分的階層性は打破されるべきものである。国家権力は可能な限り増大すべきであり、その結果として失業や貧困は除去されてゆかねばならない。

貿易と産業はそれぞれの当面している分野の問題を解決しつつ調整されて一つの組織的な計画の中に編入されるべきものである。

これらの見解がラテナウによつて構想されたところのものであつたが、それは一種の全体主義的協同体国家の理念に近い

ものであつたといえよう。[5]

然し、彼においては古典的自由主義の余香が残されてはいた。すなわち、経済の任務は福祉を増進したり、平等を創出することにあるのではなく、自由を創り出すところにある。自由とは愛という言葉に次いでわれわれの言語における最も神聖な響きをもつ言葉であるといい、経済的自由と精神的自由、および進歩へのあらゆる努力は彼の願望したところのものであつた。社会民主主義者のいわゆる主知主義は、あらゆる幸福なるものの源泉を枯渇させるものであると考えていた。

ほぼ一世紀におよぶ機械主義的、唯物主義的精神思潮を否定して、人間精神は本来の姿に立ち帰るべきであるという。すなわち、彼は、「それは正に精神の夜明けのときである。われわれが創造しようとするところのものは、深遠な内奥から生じてくる推進力によつて創られるものである。われわれはわれわれの意欲するところのものによつて生きうる。そしてわれわれの欲するところのものとは何か？　それをわれわれは知らないし知ることもできない。然しそのなかにわれわれの信念が侵し難く存在しているのである。」という。

ラテナウは、ドイツ人の価値を創造するアビリティーを過大に評価した典型的なドイツ人の一人であつたといえる。しかして、彼の構想した実力のある国家が、他国に侵略するのを防止するため、デモクラシーの原理に基づく政治の必要性についてはほとんど考慮していなかつたといえよう。自由主義者でもありかなり進歩的な思想を担つていたラテナウが、約二〇年後にナチス政権とそのイデオロギーに間接的に思想的架橋をなしたと考えても敢て過言ではないかと思われる。

前に指摘したように、ラテナウにおいては「機械化」ということが近代のあらゆる社会的諸悪の根源をなしているとみなしたのであつたが、彼の著書「Zur Kritik der Zeit, Mahnung und Warnung」においては、一八世紀末以降のドイツにおける人口の驚異的増加とそれに伴う必然的「機械化」の状況、及びそれらによつて帰結する大衆社会と非個性的人間像の形成に対して警告を発している。

すなわち彼は、「生産の機械化」「機械化と組織」「機械化と社会」「機械化と生活」というような項目を設けて、各々の局面における機械化現象を論理的に記述し、現代の人間は機械化時代に入るとともに「一日を生活するために仕事への愛情も感ぜず忙殺されて精神も魂も磨滅してしまつている。一日の労働を終つた後は虚脱してしまい、この虚脱は安息ではなく享楽を求めるのである。[6]」という。そして、この機械化はドイツ精神を心情の伴わない殺伐とした非ゲルマン化（Entgermanisierung）したものにしてしまう必然性があるという。

そして、この機械化、非ゲルマン化の状況を救済する方法としては、合理主義に基づく自由放任の市場経済の論理を廃して、国家の指導による統制経済の必要性を考えるのであるが、このことはとりもなおさずナチズムの経済思想に直結するものであることは論ずるまでもない。

然し、彼においてはより本源的な理念的問題としてこの状況を把握していたとはいえない。

すなわち、マイネッケが後年指摘した「理性人」と「生産人」という対立的な二つの人間像、およびこの二つの人間像の対立相剋に関しての処方箋も、ラテナウの問題意識の中には未だ登場していないといえるのである。

所謂、ポツダム精神とワイマール精神という二元的なドイツ精神において、「理性の共和派」に属していたラテナウも、必ずしもドイツ・ワイマール精神の継承者であつたとはいえず、むしろ、その国家、政治、経済の思想においては、広義のポツダム精神を無意識のうちに推しすすめ、ひいてはナチズムへの道程を心ならずも準備したものであつたといえよう。

(1) J. H. Hallowell; The Decline of Liberalism as an Ideology. 1946, p. 108.

(2) ibid. ix-x.

(3) クロスマン（R. H. S. Crossman）は、その著「Government and the Governed, A History of Political Ideas and Political Practice, 1952」において、「一九世紀の後半期を通じて、ドイツ人の思想は、二つの部分に分たれた。一方においては、繁忙な行政活動と忙しい日常の仕事があつた。他方においては、現存のどんな形にも適合しない生活様式を求めて苦しい努力が行われた。まだ一つの国民とはなつていない民族国家

であったので、ドイツ人は民族について夢想した。――この不満の底流は、哲学的思索ないし政治生活の中に十分には、反映しなかった。政治生活や哲学的思索において表明された理念は、新帝国（ビスマルク体制）の巨大な物質的成功に動かされたので、上品であり、かつ《西欧的》であった。――しかし、終始、これらの新理念にひそむ革命的な力は、ドイツ人の精神をひそかにフランスやイギリスのブルジョア理念から民族的ローマン主義の中へと動かしつつあった。このローマン主義は、やがて革命を考えるに至ったが、しかし、それをブルジョア国家完成のための手段としてではなく、ブルジョア理性とブルジョア的《権利》の破壊のための、また独自のドイツ的理性・ドイツ的正義並びにドイツ的共同体をもつたユニークな新ドイツ国家を創造するための手段として考えた。かくて再度、ルソーの一般意思の理論は、モニラー・ヴァン・デン・ブルックやアドルフ・ヒットラーによつて民族共同体に改造されることとなつたのである。」（小松春雄訳参照）と、述べている。

(4) ラテナウに関しては、Etta Federn-Kohlhaas; Walther Rathenau, Sein Leben und Wirken. 1924. および最近の研究では、Helmuth M. Bütcher: Walther Rathenau, Persönlichkeit und Werk. 1958. において詳述されている。

(5) F. C. Sell; a. a. O. S. 397. W. J. Bossenbrook; ibid. p.p. 373～374 & p. 377.

(6) Walther Rathenau: Zur Kritik der Zeit, Mahnung und Warnung. 1925, S. 87.

三

さて、次にナチズムに至る思想史的背景としてわれわれは政治的カトリシズム、保守主義、ニヒリズム、反主知主義の動向を考察してみよう。

合理主義と非合理主義の中間的立場がドイツの政治体制のうちでユニークな存在であつたカトリック派中央党によつて採られた。この政党の基盤は、一般政党のように経済的利害関係にその基礎をおくものではなく、共通の信仰の上に立脚したものであつた。カトリック中央党は、プロテスタントによる新しい帝国によつて脅威をうけたカトリック教の権利擁護を目標とし、一八七一年から八七年にわたつた文化闘争（Kulturkampf）においてビスマルクにより迫害をうけたが、第一次世界大戦前には左右の勢力と協力しつつ、左右勢力間のバランスを保持するまでに着々とその勢力を増大していつた。

すなわち、中央党は国家権力からカトリック教会の自由を擁護するという点を除いては思想的にも階層的にも相当広い支

持者をもつていたので、世界観的には頗るストリクトな中央党が、教会問題以外の内政、外交面では最も柔軟性に富み、文化闘争後にはリーバーの指導のもとに与党的色彩を濃くしたのである。中央党は宗教と愛国主義、母国と人類、ドイツとヨーロッパ、中央集権主義と地方分権主義のいずれをもその政策のなかに消化しようとした。この柔軟性によつて中央党はワイマール共和国のいずれの政党とも協力し得たのである。カトリック中央党はキリスト教の教義を国家、社会、経済、文化等の各分野に拡大することを望んだ。(1)

その立場からみて血液、民族、超人というような神話には反対であつたに相違ないが、それにもかかわらず、政治的カトリシズムはローマン主義の諸傾向を媒介として間接的に非合理主義に接触したのである。

百年前の革命的な自由主義に対して反対した政治的カトリシズムは、中世の神秘思想をよりどころとして中世政治思想を復活させたのであつたが、一九〇〇年以後のカトリック・ローマン主義の学派が同じ足跡を踏み、ヨーロッパの没精神的デモクラシーに反対して、プラトンの共和国の理念と中世的ギルド組織との間の線に沿つて協同体国家の理念を具体化しようとした。然し第一次大戦後の議会主義の危機は、更に強力な政府の到来を願望せしめ、それは一種の保守的デモクラシーでもあり、近代保守イデオロギーの創設者であつたモエラー・ヴァン・デン・ブルック (Moeller van den Bruck) によつて構想された「第三帝国」の理念に適応するものとなつていつた。

保守主義は第一次世界大戦以前においては、固有の政治的イデオロギーとしてよりも現実政治の局面において実現していた。

すなわち、貴族、官僚、産業資本家、軍閥等は彼らの特権を正当化するための政治理論の必要性を感ぜずにプロシヤやドイツ帝国において事実上その権力を行使していた。

保守主義思想は一九世紀初頭のハラー (Karl Ludwig Haller) やシュタール (Julius Stahl) によつて説かれた王権神授説の思想

から余り脱皮せず停滞していたといえよう。

実際政治の局面においては、貴族派に属する若い人々は再三離脱はしたが、全体として彼らは一九一八年のドイツ革命まではその位置にとどまつていたのである。

大戦後政治的保守主義を主張する新しい動向が現われたが、これらの主張者は新しいものを創造しえない反動と呼称された。然し、これら新旧両方の保守思想とも究極にはかれらを破壊する運命となつた民族主義の中に埋没してゆくのである。(2)

ドイツのナショナリズムは、ナポレオン戦役から派生しリベラリズムとともに一八七〇年のドイツ統一という本来の目標に到達した。それにもかかわらず、一九一八年の失敗のようにしばしば後退を余儀なくされたが、帝国主義的排外主義、道徳的民族主義、科学的拡大主義というような三つの異つた方法で発展を続けた。一八七〇年統一以後、民族主義者は間もなく新しい国土拡張を意図していた。一八八一年にラガルデ (Paul de Lagarde) は、「東部のわれわれの隣接国をドイツ化することは価値あることである。」「ロシアを友好的にさせてはるか東の中央アジアまで六〇〇キロメーター後退させよ。われわれはわれわれの前面に土地を必要とする。もしもロシアが拒絶するならばわれわれはロシアから土地を収奪せざるを得なく、これはとりもなおさず戦争を開始することである。(3)」と宣言した。続く一〇年間において同様な拡張計画が一八九一年に創立された汎ドイツ連盟によつて宣伝された。その計画においては、バルチック諸国、ウクライナ、ベルギー、オランダ、東部フランス及びこれらの国の全植民地をも含むものであつた。

このような法外な要求は後のヒットラーによつて再燃したものであり、人口過剰による土地の必要性から発したものであつた。

過剰人口を解決するためアメリカへ移民する方策は、ドイツにとつては国民を喪失することを意味し、更にこれらの法外な主張は優秀民族の権利と考えられていた。ここにおいて道徳的民族主義の考え方が現われてくる。すなわち、ラガルデと

ラングベーン (Julius Langbehn)[4] とはドイツ的表現といわれるものを作り出した。同時代の人々の厳しい非難をよそにして、両者は非論理的なドイツ民族の道徳的優秀性と、感情の深遠さ、ドイツ精神の讃美を語り始めたのである。これらの動向は、特に大戦後の文化人の間に浸透し固定観念となりつつあつた。他国民、例えばベルギー国民の苦難はその環境の不可避的結果とベルギー人自体の怠惰によるものであるが、ドイツ国民の苦難はそうではないというのであつた。

この不平等な考え方の底には、ドイツ国民のみが実際に深遠な心情を持ち得るのであり、故にこのような感情をもつ資格のある唯一の民族であるという潜在意識的な確信があつたのである。

ヒットラーの種族主義の名づけ親であつたチェムバレン (Houston Stewart Chamberlain) によつてこの国民精神はうらがきされた。

一九一八年の敗北によつて暫時沈黙していた汎ドイツ主義は、地理学、経済学、人類学等に基礎をおく政治技術としての Geopolitik という形で新しく科学的装いをして再登場してきた。ゲオポリティークは表面上は独立した科学論として将来の侵略の可能性を論じていた。このゲオポリティークの組織者ハウスホーファー (Karl Haushofer) は、この方法以外にドイツの世界支配の方策はないとの信念にたち計画したのである。

これらの三種の民族主義がナチス革命を準備していたといえよう。

更に第一次大戦後のドイツにおける思潮としてわれわれはニヒリズムを考察すべきであろう。大戦後、戦場から帰郷して再び市民生活に適応しえなかつた軍人の中にはその傷つけられた誇りと欲求不満からニヒリズムによりどころを求めたものがあつた。そしてこの孤立感情とアパシーのムードは、シュペングラー (Oswald Spengler) によつて促進された。

シュペングラーの著書「Der Untergang des Abendlandes」における基本的なテーマは、傷つけられた人々の心に一種の慰安を与えたといえる。すなわち、全ての文明は同一の歴史法則に従つて滅びる運命にあり、ヨーロッパ文明はその創造力

を失つた老衰期の段階に達した。そして単に技術的進歩のみが継続し、将来は技術家と軍人のみのものとなるであろうとペシミスティックな結論を下した。

更に、自由主義と社会民主主義に対するシュペングラーの批判は辛辣であつた。「真の社会主義は昔のプロシヤ主義とその測り知れないデーモン的精神の中に発見できる。」といつているが、この思想はフラストレーションを起していた旧軍人の間に深甚な影響を与えたのである。このモノメニアックな主張は、ドイツのミリタリズムの根底にユンガー以上に影響を与え、軍国主義と社会主義の結合が行われた。(5)

すなわち、軍国主義化された労働者は、再軍備のために働き、目的のない未来の決定にむかつて行進する人間と化した。個人的幸福は無意味なものであり、自由主義時代の自由とは軽蔑に値いすべきものであつて、「個人の新しい自由とは決定的場所に立つべきための知識にすぎない。」とユンガー（Ernst Jünger）をしていわしめるようになつた。ここでは「自由」は西欧世界における価値意識に支えられた理念ではなく、単なる手段視されてしまつたのである。「マルクスは目標を持つていたが実に馬鹿げたことである。人生にも人類にもいかなる目標もない。世界の存在は尊厳な事実である故、多数者の価値のない幸福なぞは決して目標にはならない。」とシュペングラーは唱えた。このようなニヒリズムもまたナチズムの民族革命への前奏曲であつた。

（1）Ludwig Bergsträsser; Geschichte der Politischen Parteien in Deutschland. 1960, S.S. 184-185. および、この中央党に関しては、「Rechtliche Ordnung des Parteiwesen, Bericht der vom Bundesminister des Innern eingesetzten Parteirechts kommission」（邦訳・政党制度の法的秩序――政党法の諸問題――自治庁選挙局）参照。

（2）ドイツ革命によつて君主制は終熄し、保守派はその社会的背景を失つた。然し、この革命に対しドイツ保守党は、ドイツ民族国民党（Deutschnationalen Volkspartei）を結成して対応した。この政党にはかつてのドイツ保守党、自由保守党の人々の小グループが集合した。ドイツ民族国民党はその最初の綱領宣言（一九一八年十二月二十七日）において議会民主制の基礎に立つもののようにみえたが、ワイマール共和国に対

しては否定的であつた。一九二八年フーゲンベルク（Alfred Hugenberg）が党の指導権を掌握した後、党は分裂した。

このような状況のもとに党の中心はナチスとの同盟によつて、ワイマール共和国に対する国民的野党（nationalen Opposition）の立場を採つたが、保守主義の勢力を結集して「保守国民党」を発展させようとする試みは挫折したのである。

この間の各政党の発展と衰亡の状況については、村瀬興雄「ワイマール・デモクラシーにおける政治指導」（年報政治学一九五五年度）に詳細に記されてある。

(3) Paul de Lagarde; Deutsche Schriften. 1886.

(4) ラングベーン（Julius Langbehn）に関しては、Louis L. Snyder; "Pseudo-Philosophy: German Irrationalism from Julius Langbehn to Alfred Rosenberg, in "German Nationalism: The tragedy of a people. 1952. p.p. 199～226. に詳細に論ぜられている。シュナイダーは「ドイツ非合理主義の偽哲学者のタイプはラングベーンに始る」と厳しく批判し、非合理主義の群像の中に「ラングベーンを始めとして、ゴビノー（Arthur de Gobineau）、チェムベレン（Houston Stewart Chamberlain）、シュペングラー（Oswald Spengler）及びローゼンベルグ（Alfred Rosenberg）」（p. 201）を数えている。

(5) Oswald Spengler; Preußentum und Sozialismus. 1921. なお O・シュペングラーの政治観については、Ernst Stutz; Oswald Spengler als Politischer Denker. 1958. が最近の研究書として注目に値する。

四

ニヒリズム的思潮は当然にまた反主知主義的傾向を促した。知性に対する懐疑と抵抗がニーチェ哲学、就中、その「超人思想」の影響のもとに起つた。ニーチェの思想の表現法とその多様性は、彼以後の世代を盲目にし、誰でもが彼の思想の中に潜むものに共鳴する何かを見出そうとした。政治的には彼はナチスの型には適しない。すなわち、彼は反民族主義者であり、反社会主義者であつたからである。然し、彼の知性に対する不信は他のなにものよりもナチズムにその精神的遺産を与えたのである。このニーチェの反主知主義は、詩人のゲオルゲ（Stefan George）を媒介として当時のドイツ思想の一面を形成した。

ゲオルゲは一八六八年ライン渓谷のビンゲン附近にあるビューデスハイムであるブドウ園主の長男として生れた。この地方はドイツでは最も早くからゲルマン精神が古代文化及びキリスト教と接触したところであり、更に又地理的にみてドイツとヨーロッパ諸国との文化的交錯地でもあつた。彼は家業を継がず一八八八年ダルムシュタットのギュムナジウムを卒業後、しばしばイギリス、フランス、イタリーの各国を歴訪し文学、芸術の精神生活に専念した。

当時のドイツ文学界は所謂自然主義が主流をなしていたのであつたが、他方この傾向に対する反潮流がさまざまな形態をとつてあらわれてきている。

この動向は単に自然主義に対する逆流という意味だけでなく、いわば一九世紀リアリズム全体への反動とみなすこともできる。その最も有力な傾向は「新ロマン主義」であつた。この新ロマン主義は自然主義と相違して、その時代や現実に、意識的距離を保ちつつ対決せねばならなかつた。すなわち、新しい現実はなくとも新しい時代様式が要求されているからであり、この派に属する文学者や詩人たちは、自分たちが市民的生活圏に属さないものと信じその態度は観念的であり自己疎外的である。自然主義の唯物論的根拠に代つて形而上学的思考や、神秘主義、神話等のようないわば非合理的なものに眼をむけるようになる。ニーチェはドイツ帝国の繁栄のうちにドイツ精神の敗北が潜むことを説き、未来こそわれわれの今日に規準を与えるべきであるという未来哲学を提唱する。換言するならば、ニーチェは一九世紀的市民文化は克服されるべき運命を担つているといい、そしてこの使命を完うする「超人」(Über-Mensch) とは、群衆から孤立して「紺碧の孤独」のうちに孤高の精神を尊び、キリスト教的「同情」など不要であり、ひたすら未来の「創造」に専念すべき人間像である。この思想は、ゲオルゲの「言葉を平俗な日常性の分野から引き離して、光彩ある領域にまで高める」とか、「物語を作り出すのではなく、気分を再現することであり、観察でなくて描写、娯楽でなくて印象なのだ」という主張の中に反映している。(1)

ワルツェル (Oskar Walzel) はその著「Geschichte der deutschen Literatur」において、「ゲオルゲは実に特殊なグループ

の天来の指導者であり、芸術宗派の強い意志の建設者でもあつた。彼は大衆から離れて傲然とし、ただ選ばれた者のためにのみ詩作をしようと思い、彼の追随者を高貴にし、しかもかかる芸術のみを最高の要求と考えない者を軽蔑することを教えた。彼は一途に芸術を清め、市民の怠惰な慣れ合いの態度を芸術から取去ることをよく考え、彼に心をよせる青年のためには、くだらぬ俗事が雑音を伴つて侵入し得ない優れた世界に住まんとする誇りある感情を、その心に呼び醒してやつた。……

ニーチェの悲願たる、ドイツ人を一層正しい文化に導くことは、ゲオルゲによつて初めて実行され絶大な成功を収めた。ゲオルゲがドイツ人に贈ろうとした審美的生活芸術が、彼と彼の抒情的天分によつて明示されたこと、及び彼が生活上の優れた地位を抒情詩に示したことは、一九世紀の終りに抒情詩の価値規準を変えた最もすぐれた記念碑とも見られよう。『第七番目の環』(Der siebente Ring) 以後ゲオルゲの抱く警告者、教育者の意志はますます強く感ぜられた。それまでは、彼の創作の高貴さによつて影響を与え、彼の作る美を通してのみ美の生活へ人を導かんとしたのであるが、更に進んで既存の世界に抗し、非教訓的な安易さを防ぐ言葉を献じ、かくてますます彼はその時代のダンテの如く人に感ぜられた。[2]」と述べている。

第一次世界大戦下のドイツ社会の分裂・混乱の体験から生れた「戦争」(Der Krieg. 1917) は、彼のうちにある祖国愛の一部を示し、人間精神の品位ある復活を説く警世の言葉となつた。後期の詩「盟約の星」(Der Stern des Bundes. 1914) や「新しき国」(Das neue Reich, 1928) などはすべて、人間の精神的再生と指導者原理とを強く訴えているが、ナチスが後年第三帝国の予言者としてゲオルゲを讃えた所以はここに存する。さて次にルカーチ (György Lukács) のゲオルゲ観をみてみよう。「きびしい貴族主義的な世界。ゲオルゲは、かれの時代の社会生活をはげしく拒否している。かれがそこに見るのは、ただ魂を殺す散文、体現された堕落だけである。かれの貴族主義は非同胞的である。かれにとつては創造的天才と粗野な大衆としか存在しない。」のであり、「同時代の資本主義とデモクラシーの世界にたいする憎しみからゲオルゲの『予言者精神』が生れる。

……詩人としてかれはこまやかなしみじみとした所を失い、司祭者風に誇張した・しばしば空虚な修辞的な激越調(パトス)に堕す。全体的姿としてかれは近づく新たな反動の精神的指導者の一人となる。かれは現代にたいして激越な非難の声をあげるのみならず、ますます鋭く、その必然的な没落と、同時に別の世界、下劣と醜悪からの救済の『新しい帝国』の出現を、『いつわりの同胞沙汰の浅薄な泥沼』から解放された世界、生長する純潔な青年によつて持来らされ、ゲオルゲ式の行動の天才によつて創造される世界の出現を告げる。[3]」のである。

そして更にルカーチは「ゲオルゲもヒットラー主義などはまつぴらであつた。かれは自発的な亡命のうちに死んだ。しかし客観的には疑いもなく、本質的ではないとはいえない関係が存在する。それは帝国主義のもとにおけるドイツ文学の内的発展が、どんなに専制的独裁の方向に文学を押しやつたかを示す――どんなにこの時代のドイツ人のうちの最も才能のある、最も信念をもつものにおいてすら、デモクラシーの破壊や自由と人権の没収のための地盤が用意されつつあつたかを示すのである。[4]」とゲオルゲ及び当時のドイツ文学思潮が、ナチズムへの路程に直線的に軌道をひいたことを指摘している。

すなわち、ゲオルゲ及びその一派の詩文においては「心理的な詩的・倫理的な生命の豊かさ」から離れ、「抽象的」であり、「人生の現実の豊かさからの疎隔であつて」「この『無時間性』から、ドイツ国民の生き生きとした具体的な歴史的状況からの詩的疎隔が生れた。」のであり、この詩文の世界における現実遊離の傾向は、世界観としてのナチス・イデオロギーに好個の素材を提供したものであつたといえよう。

(1) 菊池栄一・北通文・国松孝二・野島正城・山下肇・吉田正己著「ドイツ文学史」一六九頁、なお、Johannes Klein; Stefan George, in "Deutsche Literatur im 20. Jahrhundert, Strukturen und Gestalten, Herausgegeben von Hermann Friedmann und Otto Mann, Band II, 1961.

(2) オスカー・ワルツェル著、吹田順助監修・原健忠訳「近代ドイツ文学史」一八二―一八三頁。

(3) G・ルカーチ著、道家忠道・小場瀬卓三訳「ドイツ文学小史」一七〇―一七二頁。

(4) 前掲ルカーチ著、一七三頁。

むすび

以上において、ナチス・イデオロギーを胚胎せしめた精神状況を僅かに概観してみた。

ドイツ自由主義の特殊性格とそれがナチズムへの通路を開いた必然性を、ナウマン、ラテナウの思想をその部分的側面において考察し、カトリックの政治的イデオロギーが、ドイツ・ローマン主義へ接近した状況、保守イデオロギーとナショナリズムの「第三帝国の理念」への帰順、第一次世界大戦とその結果によるニヒリズムの発生、更に反主知主義的動向をゲオルゲの近代ドイツ文学史上における役割を介して述べてみた。そしてそれらの精神状況が直接、間接を問わず、いわばナチズムへの道程を指向していたものと考えられる。

一九三三年にナチズムの政権確立後、国家反逆者のブラック・リストに記述され、亡命を余儀なくされたトーマス・マン(Thomas Mann)が、翌年の七月に年来の友人であり第三帝国の成立とともにマンと立場を異にしたベルトラム(Ernst Bertram)にあてて「不幸極るドイツ民族よ！　私の待ち望んだ世界精神はドイツ民族を政治から解放し、その民族性を解消してしまいユダヤ人と同じく新世界に散乱させてしまえばいいのに」[1]と嘆いているが、そのマンも一九四五年のワシントンでの講演では「ドイツには善悪二つのドイツがあるのではなく、ただ一つのドイツがあるのであつて、その最善のドイツが悪魔の詭計によつて悪く化したのである。悪いドイツとは道を踏み誤つた善きドイツ、すなわち、不幸に陥り、罪と没落に至つた善きドイツなのである。故にドイツに生れた精神にとつては、罪を担つたドイツを全面的に否定し難い。」[2]とドイツ精神史に内在する矛盾性を憂愁をおびた口調で語つている。

ここにおいてわれわれは、再びラードブルフのドイツ政治観の一、二を眺めてみよう。

「人間というものを定義してみれば何にでも意味をつけたがる（deutesüchtig）生物ということができる。かれにとつてはすべてが象徴（ノンエル）となる。ひとは表面的には最も現実的に見える生活面である政治がいかに象徴で充ちているか、まさに議会というものが、いかに非現実的なものやはかり難いもののなかに迷いこむ危険につねにさらされているか、ということをよく意識しているのであろうか。[3]」といつているが、ナチス政権成立の直前（一九三一年）におけるドイツ政治の実態をイロニッシュに批判している。

「ドイツの政治においては、理性的なものが現われるのは、それが理性的であるがゆえに現われるのではなくて、もはや理性的なもの以外には何も残つていないという場合にはじめて現われるのである。[4]」更に興味ある言葉をわれわれはラードブルフの中に発見する。

すなわち、「わたくしが軍事訓練を受けていた時のこと、一人の下士官がわれわれ新兵たちに対してかつてこう語つた『自分はどんなこともできるだけ考慮するが、そのために人道主義（フマニテート）に堕することは許さん！』私はそれを聞いて、それより少し先、ある若い学者が私の法哲学思想について、ヘーゲルに関連して、フマニテートというのは啓蒙と命ばれている夜に属するのだと言つたことを思い出した。人道主義、啓蒙、正義、自由、理性、この澄みきつた概念の全光明界は不評になつてしまつた。わたくしは、それよりいつそう興味のある、いつそう意味の深い概念が存するということに異論を唱えようとは思わぬが、――ただ政治的局面でそういう概念に支配権が与えられることには異論があるのだ。世には沈思瞑想という金の秤ではかられるものもあれば、単純な常識という小商人の秤ではかられるものもある。政治的なものはその後者に属する。[5]」といつているが、このラードブルフの切なる願いも、その相対主義の哲学に支えられたデモクラシーの政治観も、ナチズムへと驀進しつつあつたドイツ精神界においてはその奏でる行進曲の中に没し去つていつたのである。

（1）Thomas Mann; Briefe 1889-1936, Herausgegeben von Erika Mann 1961, S. 367

因みに、マンの口調を掲げてみよう。「Unglückliches, unglückliches Volk! Ich bin längst soweit, den Weltgeist zu bitten, er möge es von der Politik befreien es auflösen und in einer neuen Welt zerstreuen gleich den Juden, mit denen so viel verwandte Tragik es verbindet.」

(2) Thomas Mann; Deutschland und die Deutschen 1947 S 37 なお Thomas Mann, Sorge und Deutschland, Sechs Essays. 1957 などにも、その講演やその他のドイツ問題に関する講演が集録されている。

(3) G. Radbruch; a. a O. S. 51

(4) Ders.; a. a. O. S. 52.

(5) Ders.; a. a. O. S. 51.